「介護保険」の学びの場に 府介護者（家族）の会連絡会 総会で記念講演

6月11日、大阪社会福祉指導センターで総会を開催し、会員23団体、オブザーバー2団体から計9人が参加しました。

役員改選では、会長に阪南市介護者（家族）の会の田中千余子さんが就任。

田中会長

在宅介護に期待が寄せられる中、改めて介護者（家族）の会の重要性を参加者と確認しました。

第2部では、株式会社ユメコム代表取締役の橋本珠美（たまみ）さんから『介護保険制度のしくみと改正のポイント』と題した講演がありました。

橋本さん

橋本さんは、義父母の介護をしながら仕事と育児を両立。身内以外に相談し、支援してもらえる人・サービスの存在の大きさについて触れ、「介護保険制度を理解し、利用できるサービスを最大限に活用することで、介護者の負担軽減につながる」と話しました。

さらに、介護保険制度だけでは賄いきれない部分を補う、自治体や民間企業による介護保険外サービスを説明。自治体には緊急通報システムやタクシーチケットなどのサービスがあるが、広報紙やHP上での周知に留まっているため、利用者側からサービス情報をチェックし活用する必要があると強調しました。

講演の後半では、今年度の介護保険改正についての解説がありました。

●サービスの負担割合増

今回の改正で、一定所得以上の世帯は自己負担割合が3割になりました。改正を重ね、自己負担割合が変化していることから、日頃から自己負担額＝サービス料と捉えるのではなく、本来のサービス料を把握することが大切です。

●自治体によるサービスに違い

要支援1、2程度の方を対象とした介護サービスの提供が完全に市区町村へ移行し、今後ますます自治体による介護予防・重度化防止に関する取り組みが進むことが期待できます。

一方で、介護に力を入れる自治体とそうでない自治体とで、サービス提供内容に格差が生じる可能性もあります。

介護保険制度の度重なる改正に、以前より多くの会員から、制度に対する理解が追いつかないとの声がありました。今回の講演を受け、参加者からは「あまり知らなかった介護保険の事がよく理解できた」「保険外サービスの内容の多彩さに驚いた。各市町村のサービス内容を、我々がしっかりと情報把握することの重要性を痛感した」といった感想があり、制度についての学びが深まる機会となりました。

「シャッピーハウス」OPEN!

泉佐野市 社協サテライト事務所

会場は広々としており、お洒落で居心地のよい空間です。

泉佐野市社会福祉協議会（以下、社協）は、5月14日にサテライト事務所『シャッピーハウス』をオープンしました。

社協は平成29年に事務所を移転。移転先は市民にとってアクセスが不便なことから、駅近のサテライト事務所開設に至りました。指定の曜日には、心配ごと相談や、高齢者、障がい者に関する福祉相談が行われます。さらに社協登録ボランティア等を対象に、活動の拠点となる会議室を開放しています。

事務所にはメニュー豊富なドリンクが用意された喫茶コーナーを設けており、100円でおかわり自由。市民が気軽に立ち寄り交流ができる「地域のたまり場」となることが期待されます。

このほか、冷蔵庫やコンロ、電子レンジ等も完備されています。まずは地域の子どもを対象とした学習支援の場づくりを検討し、地域に定着した後には、子どもや保護者、さらには地域の高齢者などが参加し、ともに食事ができる子ども食堂の運営も視野に入れていきたいとのことでした。

泉佐野市社協のPRキャラクター「シャッピー」もいます！

それぞれの思い生かしたボランティアコーディネーション

福祉施設ボランティアコーディネーター研修会

大阪府ボランティア（以下、V）・市民活動センターは、施設のV担当者と市町村社協の職員を対象に6月8日、社会福祉施設Vコーディネーター（以下、VCO）研修会（参加者66人）を開催しました。

研修会では、Vの基礎知識、VCOの役割、施設と社協との協働の意義やV受け入れ時の施設の対応等について学びました。

なぜVを受け入れるのか

特定非営利活動法人岡山NPOセンター所長の西村こころさんは、施設とVの協働の意義について、「利用者にとっては、施設・V団体への理解が深まるとともに、社会参加を促進できる」ことをあげました。一方で「Vにとっては、施設が自分たちの活動の場になり、自身の社会参加をしたいというニーズを満たすことにつながる」とし、協働から、双方がプラスに働く関係が生まれることを説明しました。また、施設のVCOで重要なことは「施設での居心地の良さ、活動の楽しさを提供できるか」や「活動の大変さやしんどさへのフォローができるか」など、Vの立場になり、Vに寄り添う気もちの重要性にも触れました。

講師の西村こころさん

Vがつながるためには

実践事例では、岸和田市社協Vセンター所長の青山織衣（おりえ）さんから、施設とVをつなぐ中間支援組織としての社協の取り組みについて報告がありました。

青山さんは「地域とつながるには施設を開くこと。できるだけ施設の敷居を低くすること」など施設のV受け入れの姿勢について示し、例えば施設内に共生スペースを作り、住民の方の居場所づくりをめざしたり、3時間で気軽に参加できる「ボランティアスタイル岸和田」など、実際に社協で取り組んでいる事例を交えながら施設とVがつながる仕掛けづくりについて話しました。

次に、産経新聞厚生文化事業団でVCOとして活動する吉岡喜代春さん（障害者支援施設三恵園主任）から、施設VCOとしてのV受け入れの考えや思いについて報告がありました。

吉岡さんは福祉施設のVコーディネートの考え方として「つなぐ」、「むすぶ」、「広げる」といった三恵園の地域協働の姿勢を示し、「利用者と職員のつながりだけでなく、職員とVがむすびつくことで、最終的に利用者とVの関わりに広がり、互いにより豊かな生活が実現できる」と施設VCOの役割について述べました。

「Vとつながるためには、利用者や職員が施設から少しだけ外に出る勇気をもつことが重要。それをきっかけに広がる地域支援の輪を大事にしたい」と話を締めくくりました。

参加者からは「困った時は社協に相談してみよう」など施設とVと社協の協働に向けて、前向きな言葉も聞け、大変有意義な時間となりました。

～認知症の方がキラキラ輝く街をめざして～ ゆめ伴（ともぴ）プロジェクトin門真

▲ゆめ伴ファームinれんか

「認知症の方が自信を取り戻し、明るくキラキラと輝くことのできる場を街に作っていきたい」。そんな思いから、門真市介護保険サービス事業者連絡会と行政、門真市社協、地域活動団体が連携し、「ゆめ伴（ともぴ）プロジェクトin門真実行委員会」を4月に発足しました。

門真市では、2年前からRUN伴（ランともぴ）+門真（※）を開催。「門真の街を舞台にタスキをつなぎ、助け合いながらゴールをめざす」。

認知症の方の輝く笑顔から、街の中で活躍し、ともに楽しめる場をもっと創っていこうという機運の高まりが、実行委員会の発足につながっています。

委員会では、認知症の方や家族の夢を叶えるためのプロジェクトチームが次々に誕生。

「れんかdeめんかプロジェクト」は、『街かどケアホームれんか』が所有する畑で、昔、門真市内で栽培が盛んだった綿花を栽培するものです。5月に行われた種まきには、地域の認知症の方や高齢者、保育園児も参加。収穫後は高齢者と子どもたちがともに糸を紡いで織物をつくることが予定され、多世代交流の場となることが期待されます。

他にも認知症カフェ「ゆめ伴カフェ」の開設や、認知症の方の手作りグッズを展示・販売する「オレンジマーケット」など、様々なプロジェクトを進めています。さらに若年性認知症の方にも思いを寄せ、本人や家族が気軽に相談でき、社会復帰できる場づくりも検討しています。

認知症になっても住みやすく、いつまでも活躍できる街になることをめざす委員会の取り組みに、今後も期待が寄せられます。

※RUN伴（ランともぴ）は、認知症の人や市民が日本全国をリレー方式で走り、認知症の理解を深めていく活動。この活動を参考に、地域限定オリジナル版として門真市では「RUN伴+門真」を開催。